

神が私に与えた始めての試練

伊藤好保

日本横断の計画を始めて知らされたのは、入部してすぐの5月半ばころだったと思う。その時は、おろしい事を考える人達だと他人事のように思っていた。まさか自分が参加しようとは夢にも思わなかつた。それが、いつの間にか現実に参加する事になつた。やはりこの合宿には男をひきつけるそれだけの魅力が十分にあったのだろう。

今あの合宿を思うと、やはりしんどかったの一言につきる。私は入部したのがおそかったし、保津川へも2回いってきり他のメンバーよりも練習量がかなり不足していた。合宿にはいる時点で、1ヶ月間体がもつかというのが第1の問題であった。自分の体はどうなつてもよいが、それによって他のメンバーに及ぼす負担を考えると、正直いって不安であった。それで今回の合宿では、他のメンバーに迷惑をかけないようにと、何度も心に思い必死でついていった。ボッカ、朝の4時、5時起床、沢登りと、どれをとっても下宿であまたた生活を送っていた私には、地獄を思わせる苦しみであった。バテた時もあったが自分では精一杯やつたつもりである。

あれほどのつらい合宿になんとかまがりなりにもついていけたのは、すばらしい技術と知識を身につけている先輩達のおかげである事は言うまでもない。それにもう一つ忘れてはならない事に、行った人々での人々の心の温かさと親切があげられる。わりと都会的な所にすむ私にとって、あのような経験は初めてといってもいい。あのような人々がまだ日本に数多くいるという事がわかつただけで、何かともうれしかつた。

あの長くてつらい合宿が私にもたらしたもののは何だったのだろうか。何度も考えたが、はっきりとした答はでなかつた。しかし、今はそれでいいと思う。あと何年後、あるいは何十年後にその問い合わせはきっと答になつてもどつてくると思う。

ぼおと・ア・ラ・ファルト

野村秀明

我々の河川に対する活動は、昭和37年に吉野川にファルトボートを浮かべることより始められた。残念なことに、その際吉野川を下りることはできず、幾多の危険と困難に断念せざるを得なかつた。また、昭和47年には諏訪湖より天竜川をファルトで航行することを試みたが、集中豪雨による異常な増水の為、転覆し、ファルトボートを流失したという苦い経験をもつてゐる。

そして、今回の合宿では川を遡るという始めての経験をしたわけであるが、合宿前の論点は、もっぱらその辺にあった。遡る手段において、ファルトボートを使用するという点については問題はなかつたが、果たして、そのファルトがどれほどの逆上能力があるのか等、まったくといつていいほど見当がつかなかつた。